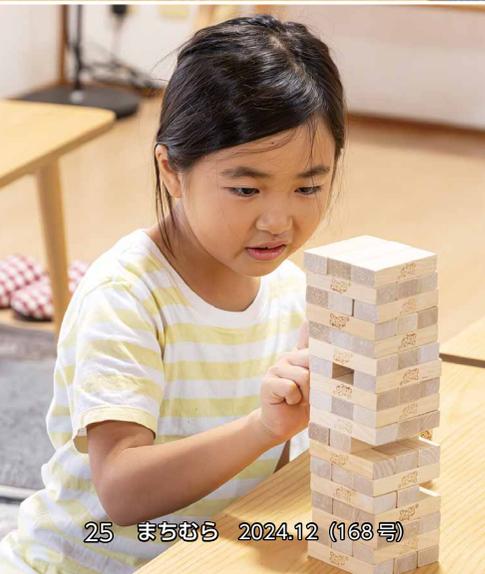




子どもも親も
安心して
自分らしく
いられる場所

鹿児島県鹿屋市
えんがわキャンパス今ここ





文部科学省の調査によると、不登校の状態にある小中学生は2023年度で34万人余りとなっており、11年連続で増加して過去最多となっている。この問題に対して、2023年3月に文部科学省はCOOLOプラン（誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策）を作成。こども家庭庁では、児童育成支援拠点事業として、養育環境等に課題を抱える、家庭や学校に居場所のない児童等に対して、衣食住の支援や学習の支援を行う拠点づくりのための事業が2024年3月から実施が始まった。

不登校対策として民間で始まったフリースクールができて約30年が経ち、ようやく国として不登校の子どもへの支援が本格的に始まりつつある。子どもたちが安心して過ごせる・学べることで、親も安心して送り出せる場所が複数あり、そんな場所を子ども自ら選択できるようになって初めて、子どもが真ん中の社会と言えるのであろう。

そんな施策が始まっている今、実際の現場での状況を知るべく、学校ではない居場所を提供している鹿児島県鹿屋市の「えんがわキャンパス今ここ」（以下、「今ここ」を訪ねた。

「今ここ」は、学校に行きたくても行けない子ども、行きたくない子ども、行けてない子どもが来られる場所として運営されているフリースクール。代表である桐原恭子さんは、鹿屋市の児童家庭センターでシングル世帯の方などへの相談員をされていた経験等を生かし、フリースクールの立ち上げを模索。拠点を構えるため、不動産会社で空き家を探し、行政からの助成金もなく、文字通り「ゼロ」から出発。そして



2023年9月に「今ここ」を立ち上げるようになった。

「今ここ」では、フリースクールの事業のほかに、保護者の会やカフェなどのイベントなどを行っている。今回は、その取り組みの一つである、子ども食堂の取り組み取材した。

朝9時になり、以前は空き家であった場所で調理が始まる。この日のメニューは栗ご飯とお肉のしぐれ煮と丸ごとベーコン。子ども食堂の取り組みには、鹿児島県の子ども食堂ネットワークやフードバンクなどのサポートもあるという。お昼に近づくにつれ、子どもたちが集まってくる。「今ここ」の情報、母親同士のクチコミなどで広まり、多い時には、30人程度の親子が来るといふ。また、社会福祉協議会とのつながりで来る子どももいるようだ。

子どもから大人まで様々な方々が来られ、みんなでわいわい食事。ご飯を食べ終わると、この日来ていた、鹿屋体育大学の学生さんと子どもたちは楽しそうに遊んでいた。

この日来ていた子どもに「今ここ」について話を聞くと、「ここでは全部が楽しい。美味しいし、遊んだりできて、この場所が好き」と元氣よく返ってきた。お母さんに話を聞くと、「学校だと自分の意見を言いくさうにしているが、ここでは自由に言える。身内以外の人とコミュニケーションが出来ることが彼女の自己肯定感を上げているのだと思う。学校でもこのことを自慢している」とのことだった。

そんな場を作り、「今ここ」で当初からボランティアをしている方に、参加した経緯を伺うと、次のように話してくれた。「今は社会人の息子が、高校生の時に学校に行けなくなった。



その時、息子もだけど、自分も苦勞をした。ここにフリースペースが出来ること聞き、やれることをやりたいという想いで参加した」

代表である桐原さんも、お子さんが病気で一時期不登校だったという経験がある。当時、子どもが人生のルールから外れてしまったという不安と、自責の念に落ち込む日々が続いていたという。そんな状況を今振り返りながら、桐原さんは次のように話してくれた。「子どもが敷かれたレールの上から外れるのが怖い。けれども、本当はレールが外れたとしても自分が自分らしくありのままに居られることが大事で、どうなっても良いよという寛容さが、子どもに対しても親に対しても大切だと考えます。そして自分の存在こそが尊く、互いを尊重して自分らしく生きることこそが大切と心から思える居場所を作っていきたいと思います」

「今ここ」は全国の民間のフリースクールと同様に、地域の子どもたちにとって必要不可欠な場になっている。だが、その取り組みの資金繰りは、持ち出しでの活動が多く、大変厳しいという。子どもたちにとって学校以外の大切な居場所になっているフリースクール。そこに改めて光が当たり、持続可能な場所にならないければ、子どもが真ん中の社会になるのは難しいだろう。

【連絡先】 えんがわキャンパス今ここ（生活学校今ここ）
 代表：桐原恭子さん
 TEL：080-5253-4556